

ホウロクシギ *Numenius madagascariensis* (Linnaeus)

【選定理由】

アジア大陸東部のみで繁殖する種で、2015年に国際自然保護連合のレッドリストでも絶滅危惧ⅠB類に評価されている。愛知県鳥類生息調査では、県内で最も生息数の多い庄内川河口では1990年代半ばまで20羽近い記録もあったが、2011年以降は1～5羽程度にまでに減少している。汐川河口では1991年まで5羽以上の記録もあったが、近年は多くても1羽程度で記録されない年も多い。現在の愛知県で春秋共に県内全域に飛来する本種の数、多い年でも5羽程度と推測される。

【形態】

全長53～66cm、翼開長110cm。上面は、淡褐色で、頭頂から背、肩羽、雨覆に暗褐色の斑がある。顔、頸、胸にかけて黒褐色の縦斑があり、腹と下尾筒は淡褐色。翼下面は淡褐色で、下雨覆に黒褐色の横斑がある。腰は背と同様な褐色で、上尾筒と尾は淡褐色で黒褐色の斑がある。嘴はとても長く、大きく下に湾曲する。雄雌同色であるが、雌の方が雄よりも大きい。



愛知県西尾市, 2018年10月26日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋の渡りで伊勢・三河湾沿岸の、主に干潟に生息するが、春は水田にも入る。

【国内の分布】

春秋の渡りで、北海道から沖縄まで全国の沿岸部に飛来する。

【世界の分布】

シベリア東北部・中国東北部で繁殖し、ヨーロッパ南部、フィリピン、ニューギニア、オーストラリアで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

近縁で姿や形がよく似ているダイシャクシギが塩水の干潟に強く依存しているのに対し、ホウロクシギは干潟だけでなく、汽水や淡水の湿地にも生息し、春は3月中旬から5月下旬頃まで、秋は8月から10月にかけて単独または数羽で生息する。主に干潟のカニ類を食べるが、特に春は耕作前の水田で、昆虫類などを捕食することもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

1972年の秋に鍋田周辺で22羽、1970年代半ばに愛知県全体で67羽が数えられた。その後も、1981年に飛島干潟で21羽、1987年に庄内川河口で28羽などの記録がある。現在の飛来地は庄内川河口、矢作川河口、一色干潟周辺、汐川干潟周辺、伊川津干潟などであるが、庄内川河口周辺と、一色干潟周辺以外では飛来しない年も多い。干潟では、餌となるカニの生息数が減少している。

【保全上の留意点】

沿岸部に残る湿地を保全することは当然であり、環境の回復に努める必要がある。河川から供給される栄養塩類の減少が問題となっており、試験的に終末処理場の管理運転が実施され始めたが、さらに研究が進められることで、豊かな海や干潟が復活することが望まれる。

【特記事項】

春の渡りでは、3月の半ばから九州や沖縄方面の天候に関係なく姿を見せることから、オーストラリアの方向から真直ぐに太平洋を越えて飛来することが推測されていたが、越冬期の分布が似ているオオソリハシギでは、衛星追跡で推測通りの渡りコースが証明されている。

本種は、種の保存法で国際希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真野 徹, 1984. 黒田長久編, 決定版 生物大図鑑 鳥類, p.136. 世界文化社, 東京.

(高橋伸夫)